
巻頭の辞

嘉納治五郎師範は明治15(1882)年2月に嘉納塾を、同5月に講道館を創立した。爾来、柔道の技術と理論、及び修行に於ける教育的研究を続け、体育としての柔道、真剣勝負法としての柔道、修心の道としての柔道を確立した。

ここに従来の柔術は、単に武道という枠に留まるものではなく、広く人間の踏み行うべき道、柔道という新しい運動文化へと止揚されたのである。

師範は更に柔道を以って己の完成、世の補益という人類の平和と幸福を目的とする理想を掲げ、国内はもとより国際的普及にも尽力した。今日、柔道が世界の老若男女に支持され、五輪競技大会の一種目ともなっている所以である。

柔道実技の著しい普及に即して、昭和7(1932)年、師範は新たに柔道医事研究会を創設した。ここに柔道は、本格的な学術研究の対象ともなった。以後、医学的所見の資料が蓄積され、柔道の安全面、体力面、又体位の向上等の裏付けを検証する専門的作業がなされて来た。所謂、柔道の科学としての地歩が固められて来たのである。

柔道医事研究会は、師範没後の昭和23(1948)年、その名称を講道館柔道科学研究会と改め、従来の医学中心の学術研究からその領域を拡大した。即ち、柔道を対象とした歴史的研究、体力的研究、技術的研究、指導的研究、そして心理的研究領域等である。

新しい研究会は、集会を開いて学術討論の場を設け、紀要を発刊して研究成果を公にする活動を以って、学術研究の伝統を継承している。

本年度もここに研究結果が纏められ、本研究会紀要第十一輯として上梓する運びとなった。江湖のご叱正を期する次第である。

擲筆に臨み、平素より柔道の学術研究に精力を尽くし、一定の成果を上げて来た本研究会々員の努力に対し、深甚の謝意を表すると共に、向後益々実りある活動に勤しみ、本会の永き存続と発展の為に貢献して頂きたいと願う。

平成19(2007)年3月吉日

講道館長 嘉納行光